



OVERSEAS

India — インド —

海外事情



魅力的で不思議な国インド



高城 信彦 TAKAGI Nobuhiko
大日本コンサルタント株式会社 / 顧問

南アジアの中心を占めるインドについて、私たちは何を知っているだろうか。仏教発祥の地、ヒンズー教、ターバンとサリー、カレー、最近ではIT産業の急速な発展であろう。間違いなくどれもがインドであるが、インドを語る多くの人が言うように、インドは実に多様で複雑で、単純化することはできない。インド紙幣には、ヒンズー語を含む16種類の言語と英語で金額が記載されており、多様性の例として挙げられている。

インドの鉄道整備や周辺国と連絡する道路整備などに日本が支援している。道路プロジェクトの調査

に参加したおりに垣間見たインドを紹介する。

広大な国土、巨大な人口

とにかく大きな人口をもつ広大な国である。南北と東西に約3,000kmの範囲に広がる国土面積は、東西ヨーロッパ全体に匹敵し、12億を超える人口は近い将来に中国を追い越して世界一になることが確実である。インドの人口に相当するアジアの国を集めてみると、まずASEAN10カ国の合計が約6億人、パキスタン、バングラデシュなどインドを除く南アジア主要5カ国が約4億人、それに東アジアから中国を除く日本、韓

国、北朝鮮にモンゴルが約2億人、以上19カ国の総人口がわずかに12億人に足りない。つまり、人口だけに限れば、東アジアと南アジアの地域から中国とインドを除いた全ての国の総人口に相当する。

ニューデリーとオールドデリー

日本の年配者は、インドの首都はニューデリーだと教わった方が多いと思う。現在は首都デリーと記載されている場合とニューデリーとされている場合があつて紛らわしい。デリーは大きく2つの地区からできており、もっとも古くから発達したオールドデリーに対して、1911年に行政府がコルカタからデリーに移されたときに、新行政都市として整備されたのがニューデリーである。都市計画によって広大な地に整然と幾何学的に配置された道路網をもち、今では道路に沿って大きな樹木がしげり、都市計画が完全に成功した模範的な都市であると言いたいところだが、現実には道路機能の面で大きな問題に直面しているように思う。多くのラウンドアバウトが渋滞の原因となり、快適な都市とはいえない。

表1 インドの概況

面積	3,287,469km ²
人口	12.1億人 (2011年)
首都	デリー
主要都市	ムンバイ、コルカタ、バンガロール、チェンナイ
住民	インド・アリア族、ドラビダ族、モンゴロイド族ほか
言語	連邦公用語はヒンズー語、憲法公認の州の言語は21
宗教	ヒンズー教 (79.8%)、イスラム教 (14.2%)、キリスト教 (2.3%)、シク教 (1.7%)、仏教 (0.7%)、ジャイナ教 (0.4%)
政治体制	共和制
名目GDP	2兆74億ドル (2015年)
一人当たりGDP	1,581ドル (2015年)
経済成長率	7.9% (2015年)



写真1 オールドデリーの賑わい

ターバン

インド人はターバンを頭に巻いていると思われがちだが、デリーでターバンを巻いた人は明らかに少数派であるし、それ以外の土地でもあまり見かけた記憶がない。それもそのはずで、ターバンは全人口の2%弱しかないシク教徒の象徴だからである。

2004年から10年間にわたり首相を務め、経済の自由化を推進して今日の経済発展に大きく貢献したマン

モハン・シン氏がターバンを巻いていたことを覚えている方がいると思う。意外な事実であるが、独立後のインド首相の中でターバンを着用していた人物は彼だけで、ターバンを身につけた初めての首相であった。初代首相ネルーは白い帽子をかぶり、現モディ首相は何もかぶっていない。

シク教徒は勇敢さで知られ、インド軍人の中でヘルメットの代わりにターバンをつけているのはシク教徒

である。軍用ヘルメットの使用目的を考えると、シク教徒のターバンへの絶対的な信頼がわかる。

インド英語と数字

日本人にとって、インド人の話す英語を聞き分けるのは、かなり苦勞があると言われている。強い巻き舌から繰り出される発音への不慣れ、早口、イントネーションの違いなどが理由であろう。日本人が中学校から習ってきた英語はアメリカ英語が中心であるため、違和感を覚えるのかもしれないが、慣れてしまえば大きな問題ではない。

数字の単位も慣れないうちは大変な混乱のもとになる。世界的には、大きな数字を3ケタごとに位取り、つまりカンマを入れて表記するが、インドでは1,000以上の数字は2ケタごとの位取りになる。インドの新聞で、3ケタに続いて2ケタごとにカンマを入れた数字があつたとしても、それはけっして間違いではない。また、新聞や報告書に頻繁に出ているLakh (ラク) とCrore (クロ) という単位は、初めてインドを訪れた外国人にとっては頭痛の種である。Lakhは10万を、Croreは1千万を表している。



写真2 インド最高の観光地タジ・マハール



写真3 繊細な加工をした大理石

タジ・マハール

インドで最も有名な建築物であるタジ・マハールは世界遺産であり、確かに荘厳で気高く美しい。このタジ・マハールはインドがイスラムの影響を受けていた時代に建設された。デリーから高速道路を使って3時間くらいの距離にある旧都アグラの川岸に建っている。白い大理石で作られたタジ・マハールと赤いレッドサンドストーンでできている皇帝の居城アグラ城は、少し離れているが十分に遠望できる距離である。

17世紀に絶頂期を迎えていたムガル帝国第5代皇帝シャー・ジャハーンは、36才で死んだ皇妃ムムターズ・マハルの墓所として約20年かけて壮麗な廟を建設した。これが今も残るタジ・マハールである。建物のほぼ全体が白い大理石でできおり、手の込んだ透かし彫りや美しい色の石のはめ込みは、素人目にも際立った美しさがわかる。ムガル帝国はやがて傾き滅び去ったが、タジ・マハールは今でもインド人の誇りであり、国内外から訪れる多くの観光客を魅了し続けている。

クトゥブ・ミナール

デリーにある最も古い建造物の一つが、1193年にクトゥブ王が建設した高さ72.5mの石造りのミナールなど残る世界遺産クトゥブ・ミナール



写真4 クトゥブ・ミナール

ルである。ミナールはモスクに付属する塔で、礼拝の時間を知らせるために使用された。基部の直径は15m、最上部の直径は2.5mである。高層建築を見慣れている現代人にとって、この塔の高さにさほどの驚きはないかもしれないが、近づくると実物の存在感は圧倒的である。塔はインドを代表する石材レッドサンドストーンで組み立てられているので赤っぽい色をしている。表面には細かい彫り物がほぼ全体に施されている。この塔の下には、インドで最初に建設されたモスクが残されている。

さらに驚くのは、この塔から少し

だけ離れた場所に立つ4世紀に建設された高さ7mのチャンドラグルマンの鉄柱である。鉄柱表面に刻まれた文字によって、建設時期がはっきりしている。鉄柱はほとんど純鉄に近い成分であり、リン酸化合物が表面を覆っているため、朽ち果てずに今に残っているという。1600年以上の年月を超えて立っている黒い鉄柱が、インドの輝ける遺産としてこれからも永く残っていくことを信じてみたい。

ガネーシャ

インドを話題にするとき、ガネー



写真5 象頭の神ガネーシャ



写真6 北東州の昼食



写真7 北東州のお土産



写真8 大河ブラマプトラ

シャを外すことはできない。インドのいたるところに象の頭をした神様の像が祭られており、これが知恵と学問の神ガネーシャである。ヒンズー教の多くの神様のなかでも、ガネーシャはインドでもっとも人気の高い神様のひとつである。象の頭と4本の腕があり、よく見ると足元からガネーシャを見つめる一匹のねずみがついている。そしてガネーシャの2本ある牙のひとつは必ず折れている。ガネーシャは日本の密教に取り入れられて、歓喜天となって仏教の守護神になっている。

神話によると、ガネーシャはヒンズー教の最高神シバと妻パールバティの息子であった。お互い初対面のときに争いとなり、自分の子供と知らなかったシバ神はガネーシャの首を切り落とした。母親が悲しみに泣き叫ぶので、困ったシバ神は最初に出会ったものの首をガネーシャに取り付けることにした。そして運悪く最初に出会ったのが象であったことから、ガネーシャは象の頭を持つことになった。ねずみはガネーシャが

移動するときの乗り物である。あるとき、ねずみから誤って転落して片方の牙を折ってしまったそうである。ただし、片方の牙が折れた理由には、別の言い伝えもある。インドの神様は多様であるが、ガネーシャは最も親しみのある神様である。

北東州7州

インドの国土は概ねダイヤモンド形をしており、象の耳の形にも似ている。しかし地図をよく見ると、ダイヤモンド形の国土の北東方向から鶏の頭のように東に突き出た土地が広がっている。インドからバングラデシュが抜け出たため、ダージリングなど西ベンガル州北部とともに幅20kmくらいの狭い回廊によって、インド本土とつながることになった。周囲を中国、ミャンマー、バングラデシュ、ブータンと接している。

このエリアは北東州7州と呼ばれ、その中心はお茶で有名なアッサム州で、降雨量が非常に多い。険しい山地で、地理的に中国と国境が近い事情もあって、インド本土とは



写真9 代表的なビール

発展の格差がある。州によっては日本人と変わらない風貌の人が多く、日本人が違和感をもつことはない。商店などの看板の文字も、いわゆるインド文字でなくアルファベット(ラテン文字)である地域も多い。まぎれもなくインドでありながら、他の地域と大きく異なる文化習慣が行われている地域である。

ブラマプトラ川はヒマラヤの北側に源流をもち、ヒマラヤの南側で東から西にアッサム州を縦断する。バングラデシュに入ってガンガー川(ガンジス川)と合流し、最後はベンガル湾に流れ込む大河川である。私はアッサム州の西部でこの川を見たが、雨季終盤の9月の川幅は15km以上に広がり、海かと錯覚するほど一面の水であった。

インドは長い歴史をもち、不思議な魅力にあふれた国である。面積と人口だけでなく、経済規模においても、近い将来にアジアで1位2位を争うようになることは確実であろう。古くから日本文化に影響をもたらしてきたインドが、多様性と文化を維持しながら発展し、地域に安定をもたらすことを期待する。